恩師　池口杜孝先生　寄稿文

卒業五十周年を祝う

正に「光陰矢の如し」諸君が岩手中・高等学校を巣立って早、五十年の歳月が経過したとは驚きであり、同時に誠に喜ばしい限りであります。

昔は人生五十年といわれたものですが、今は平均寿命が延び、諸君が間もなく「古希」を迎えるように、七十歳は「古来まれなり」ではなくなりました。とは言え節目の古希の祝いもしなければなりませんね。

私もいつの間にか馬齢を重ねて八十五歳になってしまいました。嘗て教壇に立って諸君に何を教えたのやら、今更後悔しても始まらないことですが、諸君がそれぞれに努力して意義ある人生を過ごし、今日を迎えたことは称賛に値し喜ばしい限りです。しかも、毎年同期会にはお招き受け優待されるなど、教師冥利に尽きるというものです。

医者の薬は絶えませんが、老妻は歩行が不自由で介助のため運転免許も返納せず、天候が良いと高速道路を使っての道の駅巡りも続けております。また、教え子がボケ防止のためと言ってマージャンに誘ってくれるなど、思いやりに感謝しつつ月に二回ぐらい楽しんでおります。

能力別クラス編成になったのは十四回生からで、当時の有名校進学ブームに乗ってのことでした。私はその時も四クラスのうち一クラス選別されたクラスを担任させられ大いに悩みました。二十回生の時はコース別の能力編成で文化系三クラスの選抜クラスの担任でした。成果を上げようとする学校側の都合で生徒を区別したようで、進学校の宿命とは言え生徒諸君には嫌な思いを押し付けたことを情けなく思っていますが、決して人間を差別したのではありません。一人ひとりの個性を大事にし、平等に接してきたつもりです。社会人になって現実社会を生きてみて、選抜組が特に成功しているとは限らないことを皆承知しているはずです。

諸君が残りの人生をどう生きるのか、それこそ各自に任された重大事です。決して孤独にならないでください。多くの友を大事にし、お互いに交流を深めて、いろいろと楽しみを見つけ、明日は何をしようかと前向きに生きることを願って止みません。